

子供の歩行中の交通事故（2）

交通事故総合分析センター 研究部 主任研究員 山口 朗氏

（「交通安全教育」2017年3月号）

はじめに

これは（一財）日本交通安全教育普及協会が発行している「交通安全教育」3月号から内容を抜粋したものである。図の一部も同論文から引用させていただいた。表題や文中の「子ども」は「子供」と表記させていただく。

■ 子供の歩行中の交通事故の特徴

図1は小学1年生の歩行中の交通事故が発生した場所を、単路、交差点、交差点付近及びその他の区分で示したものである。

図2は20歳から29歳の構成率である。

いずれの世代も、交差点での事故の割合が半数近くを占めている。

さらに、小学1年生の事故では、単路のほうが20歳から29歳に対して11%高く、小学1年生は、交差点と単路がほぼ同じ割合となっている。

また、きちんと整列して歩いているのに、車両に突っ込まれる事故が頻発しているのは、御承知のとおりである。

図1 小学1年生の歩行中の交通事故死傷者数道路形状 構成率（2015年）

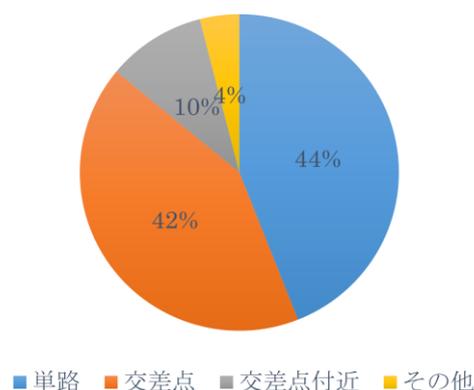
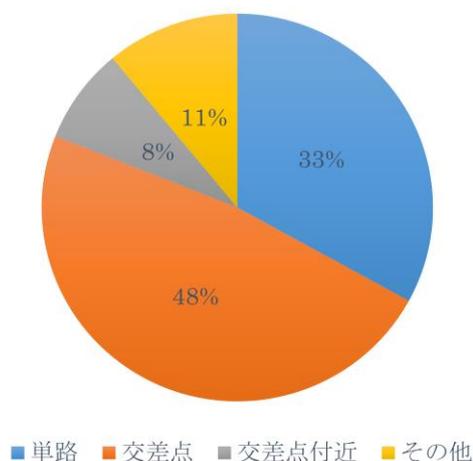


図2 20歳～29歳の歩行中の交通事故死傷者数道路形状 構成率（2015年）



事故が起きたとき、小学1年生の子供はどのような行動をとっていたのか。横断歩道等（歩道橋を含む）とその付近を横断中、横断歩道等以外を横断中、対面・背面通行中及びその他に分けて調査している。

図3によると、20～29歳では対面・背面通行中が最多であるが、小学1年生では横断歩道等以外を横断中が最多である。

図4によると、横断歩道等を横断中が両グループとも多いが、横断歩道等以外を横断中が、小学1年生に多い。家庭で指導はしているであろうが、子供たちだけで遊んでいる際、誰かが横断歩道以外を渡ると、それに続いて渡ってしまうという傾向があるものと考えられる。

過去の5歳以上の未就学児童、小学1年生及び小学2年生の死傷者数データを見ると、以下のことが言えるようである。

- ① 小学校入学前の1月辺りから小学1年生の5月にかけて、徐々に死傷者が増加している。
- ② 小学1年生の事故による死傷者数は、4月よりも5月が多い。

以上のことから、子供に対する安全教育は、小学校入学前の12月頃から始め、入学後は1ヵ月以上継続して指導を行う必要があるようである。

図3 単路での歩行中の交通事故死傷者数
事故類型構成率（2015年）

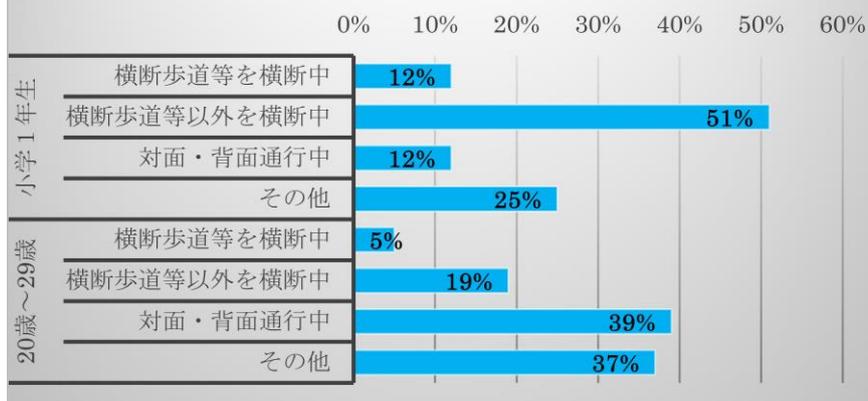
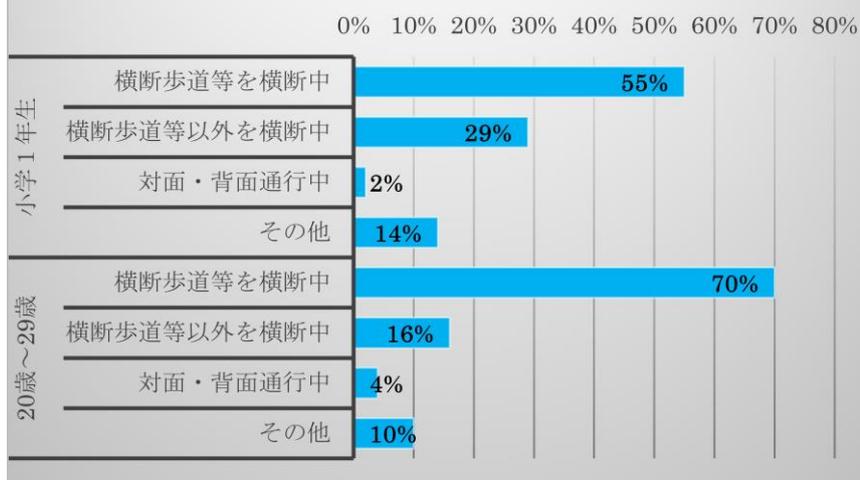


図4 交差点での歩行中の交通事故死傷者数
事故類型構成率（2015年）



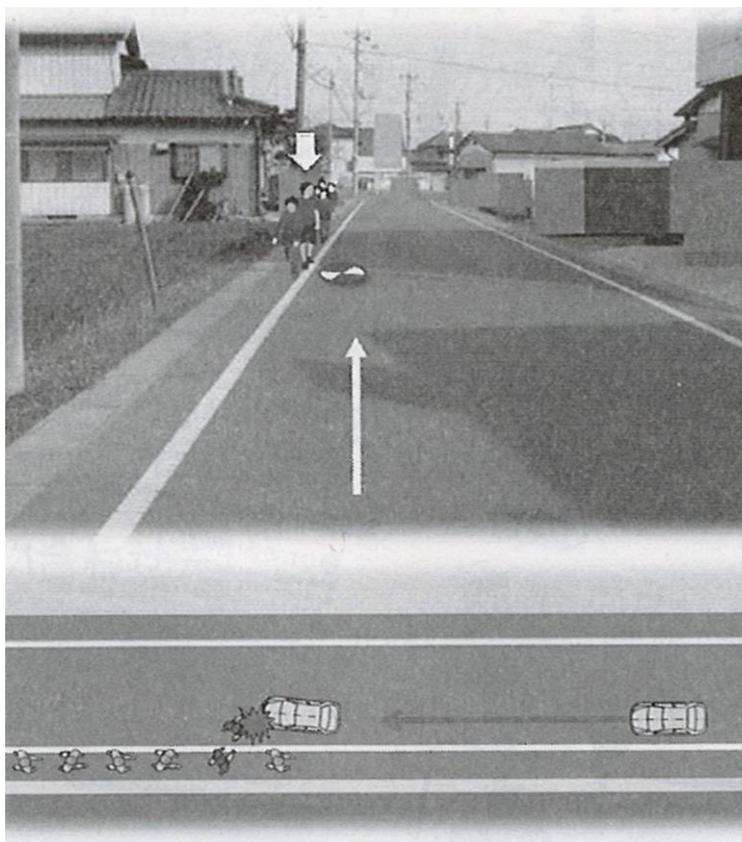
■ 小学 1 年生の歩行中の交通事故事例

引用文献の図を借用して説明する。

3月の朝7時台のこと。通勤のため軽乗用車を運転していたAは、センターラインのない幅員4.2mの道路を30km/hで走行していた。前方を一列に並んで歩いてくる6人の小学生を見つけたが、そのまま直進して通り抜けようとした。

そのとき、二番目にいた子供が突然道路に飛び出して車に衝突し、この子は脛骨を骨折した。

小学生は、低学年になるほど飛び出し事故が多い。この事故の原因は、小学生の飛び出しと、軽自動車を運転していたAが列から距離をとることなく通過しようとしたことにある。



小学 1 年生の事故事例(引用文献から)

おわりに

家庭や学校においては、しっかり交通安全教育を実施する必要があり、運転者としては、「子供は予測できない行動をとるものである」ことをしっかり頭に入れ、予防運転に心がけなければならない。

(終わり)